

[IV]

文 献 解 題

## エジプト [Egypt]

ムスリム同胞団の誕生の地であり、かつ今日に至るまでその活動の中心たり続けているエジプトに関しては、文献も多いが、ここでは運動の展開の全体像を描くに役立ついくつかの基本書のほかは、いく人かの主要なパーソナリティーについて、彼らの著作と彼らについて書かれたものを取り上げるとどめた。また、第Ⅱ部で論及した7月革命の前後とナセル政権との関係の問題に関する文献を若干取り上げた。

### I. 全般

- (1) Husaini, Ishak Musa, The Moslem Brethren: The Greatest of Modern Islamic Movements, Beirut, Khayat's College Book Cooperative, 1956 (rep. ed.: Westport, Hyperion Press, 1981).
- (2) Harris, Christina Phelps, Nationalism and Revolution in Egypt: The Role of the Muslim Brotherhood, The Hague, Mouton, 1964 (rep. ed.: Westport, Hyperion Press, 1981).
- (3) Mitchell, Richard P., The Society of the Muslim Brothers, London, Oxford Univ. Press, 1969.

欧文献では、上の3つが必ず参考文献に上げられる。ただし、いずれも1960年代以前の同胞団を対象としている。(1)は1955年にアラビア語で出

版されたものの英語版。原本は同胞団について書かれたものとしては、最初のまとまった著作である。(2)は、ナセル政権下での同胞団解体の後の1963年に書かれたものであるが、将来に同胞団が復活する可能性をポジティブに扱っている点(かつ、ナセルがエジプトを支配している限りは復活は不可能であるが、エジプト以外で力を蓄え、ナセルの死後に備えることはできるとも言っている)、同胞団が限界を超えるためには、もう一人のムハンマド・アブドゥが出て、原理主義者とリベラル派ムスリムを統合する理念を提出しなければならない、と述べている点は卓見である。(3)は今日ではスタンダードな文献となっているが、他方、著者のその後については、同胞団の側から1970年代末期からミッチェルが対イスラーム運動の諜報に関与していることを問題にする記事が多く出されている。なお、同書に関しては、本書第Ⅱ部2. を参照のこと。

- (4) Mitchell, Richard P., 'Abd al-Salām Riḍwān tr., Al-Ikhwān al-Muslimūn, Cairo, Maktabah Madbūlī, 1985 (2nd ed., 1st ed.: 1977). — — —, Richard P., Munā Anīs and 'Abd al-Salām Riḍwān tr., Īdiyūlūjīyah Jamā'ah Al-Ikhwān al-Muslimīn, Cairo, Maktabah Madbūlī, n.d.

上記ミッチェルの書を2巻に分けてアラビア語に訳したものを。これをアラビア語で出版することの意味はさておき、イスラーム関連のコンセプトについて英語から逆に直訳しているものが散見するのが気になる。研究者にとっては、ミッチェルの原書と合わせて使うと多少便利である。

- (5) 'Abd al-Ḥalīm, Maḥmūd, Al-Ikhwān al-Muslimūn: Aḥdāth Sana'at al-Tārīkh, Ru'yah min al-Dākhil, 3 vols., Alexandria, Dār al-Da'wah, n.d. (Vol.1 and 2), 1985 (Vol.3).

全3巻、総計1,700頁を越える同書は、著者の直接の見聞だけを材料とし

た第一次資料であり、いかなる同胞団研究にも必須文献と言える。1936年以来書記局にあって、同胞団の主要な展開をつぶさに見てきた著者は、すぐれた記憶力でそれらを丁寧にかつ時を経た現在では非常に冷静に語っており、実際に同胞団を知らない者でもかつての同胞団の運動のダイナミズムを十分にうかがうことができる。第一巻は1928年から1948年まで、第二巻が1948年から1952年、第三巻が1948年から1971年まで。ただし、1954年以降は主として弾圧についての叙述であり、かつ著者は1956年の釈放以後活動を停止していたので、記述のほとんどは1956年以前に関してである。

(6) Dekmejian, R. Hrair, Islam in Revolution: Fundamentalism in the Arab World, Syracuse, Syracuse Univ. Press, 1985.

いわゆる原理主義の現象を「原理主義」として取り扱っているので、当然方法論的には問題であるが、同胞団およびその他のイスラーム諸運動のアラブ世界における具体的な分布という点からは、非常にインフォーマティブで便利。エジプトについて、同胞団とポスト・同胞団の組織の見取り図という点から、テナティブな分類を行なうには種々の面で示唆を得ることができる。

(7) Zakī, Muḥammad Shawqī, Al-Ikhwān al-Muslimūn wa al-Mujtama‘ al-Miṣrī, Cairo, Dār al-Anṣār, 1980 (2nd ed. in Egypt).

第一版は1954年。組織構造については、研究の多くにおいてこれが主たる出典となっている。また、1940年代からの、カイロ、ギザにおけるモスク活動、医療、教育活動、同胞団の出版物、1952～53年に行なわれた講義などについて具体的資料が掲載されているので、きわめて有用である。

(8) Sha‘īr, Muḥammad Fathī ‘Alī, Wasā’il al-I‘lām al-Maṭbū‘ah fī Da‘wah al-Ikhwān al-Muslimīn, Jedda, Dār al-Mujtama‘,

1985.

同胞団およびその関連の印刷メディアの研究書。600頁を越える大部のもので、調査ツールとして非常に有用。

(9) Jābir, Ḥusayn bin Muḥammad bin ‘Alī, Al-Ṭarīq ilā Jamā‘ah al-Muslimīn, Maṣūrah, Dār al-Wafā’, 1987.

イスラーム共同体（ジャマア）の本質およびその再生の道は何かということ論じた書であるが、オスマン朝カリフ制崩壊後のジャマア復興への運動として、「アンサールッ=スナ」「解放党」「タブリーグ協会」と同胞団を取り上げ、比較研究している。

## II. ハサン・アル=バンナー

創設者アル=バンナーの重要性については疑問の余地はないが、では、その思想について十分研究がなされているかと問えば、答えは否定的とならざるをえない。現実の場においても、1960年代からはクトブまたはクトブ主義の潮流が強くなったため、アル=バンナーの思想は影が薄くなった感があったが、近年はむしろ復活してきている。そこには、多少はクトブ主義を中和しようとする意図的な部分もあるが、イデオロギー的、組織的に見ても、クトブ主義の時代を過ぎた後で、アル=バンナー的なものを復活、再発展させる必要が生じていることも看取できる。新しい観点からアル=バンナーの思想を研究する必要がある所以である。

(10) Al-Bannā, Ḥasan, ‘Abd al-‘Aẓīm Ibrāhīm al-Muṭ‘inī ed., Al-Waṣāyā al-‘Ashar, Cario, Dār al-Shurūq, 1981.

『10の指示』。『20の原則』と並んで重要な団員の「学習基本文献」。

(11) ---, Al-Rasā'il al-Thalāth, Cairo, Dār al-Shihāb, n. d.

アル＝バンナーの「基本文献」である『我々のダーワ』『何をもって人々に呼びかけるか』『光りに向かって』を収録。

(12) ---, Al-Ma'thūrāt, Cairo, Dār al-Shihāb, 1976.

団員が日課として唱すべき祈祷集。

(13) ---, Al-'Aqā'id, Cairo, Dār al-Shihāb, 1978.

同胞団の前提となるべき『信仰箇条』（当然ながらスニー派的）。

(14) ---, Majmū' Rasā'il al-Imām al-Shahīd Ḥasan al-Bannā,  
Cairo, Dār al-Shihāb, n. d.

アル＝バンナー著述集。上の(9)(10)(11)のほか、11本を収録。

(15) ---, Mudhakkirāt al-Da'wah wa al-Dā'iyah, Dār al-Shihāb,  
n. d.

アル＝バンナーのメモワール。1930年代末までであるが、同胞団史に関する最も重要な史料のひとつであろう。内容は、手元の資料の有無によるためか、時には純粹に回顧録風であるが、旅程や組織のメンバー名、講義のテーマなどが克明に記された部分もあり、指導者としてのアル＝バンナーの動きや同胞団の活動のあり方がよくわかる。

(16) ---, Charles Wendell tr., Five Tracts of Ḥasan al-Bannā,  
Berkely, Univ. of California Press, 1978.

上のアル＝バンナー著述集の中から、『昨日と今日の間で』『我々のダーワ』『何をもって人々に呼びかけるか』『光りに向かって』『ジハード論』を訳出。

- (17) — — —, Fahmī Abū Ghadīr ed., Qaḍīyatunā bayna Yaday al-Raʿy al-ʿĀmm al-Miṣrī wa al-ʿArabī wa al-Islāmī wa al-Ḍamīr al-Insānī al-ʿĀlamī, n.p., 1978.

アル＝バンナーが暗殺される前の最後の著。表題作は1949年に書かれたもので、同胞団の状況、立場、政府からの（革命準備の）嫌疑の否定などが述べられている。また、同胞団の解散令に関して当時の内務次官に対して反論した書簡が収録されている。編者は、1934年以來の団員で、アル＝バンナーの側近のひとりであった。編者解説が付けられている。

- (18) ʿĀshūr, Aḥmad ʿĪsā, Hadīth al-Thulāthāʾ li-l-Imām Ḥasan al-Bannā, Cairo, Maktabah al-Qurʾān, n.d.

アル＝バンナーはかつて火曜日と木曜日の夜、毎週講義を行っていたが、本書は火曜日の講義を記録し、編集したもの。

- (19) Al-Jabrī, ʿAbd al-Mutaʿāl, Limādhā Ughtuyla Ḥasan al-Bannā?, Cairo, Dār al-Iʿtiṣām, 1978 (2nd ed.).

表題からはアル＝バンナーの暗殺が主題のようであるが、内容的には同胞団史で、主体的立場からその成立と発展の背景をかなり広く扱っているので、非常に参考になる。同胞団成立の契機のひとつとして、はっきりと、オスマン帝国の終焉によるカリフ制の崩壊を指摘している。終りにQ & A形式で、同胞団についてエジプト国内でしばしば問題にされる諸点について答えているのも、何がそのような点であるか、ということも含めて参考になる。

- (20) Khayyāl, Muḥammad ʿAbd al-Ḥakīm, Sharḥ wa Taḥlīl Al-Uṣūl al-ʿIshrīn, Alexandria, Dār al-Daʿwah, n.d.

アル＝バンナーの『20の原則』の解説書。

(21) Rizq, Jābir (ed.), Al-Imām al-Shahīd Ḥasan al-Bannā bi-Aqlām Talāmidhatihi wa Mu‘āṣirīhi, Manṣūrah, Dār al-Wafā’, 1986.

アル＝バンナーについて、彼に直接接した同胞団メンバーを中心として37人が書いたものを、集め、編集したもの。著者は1988年に亡くなるまで、復活した後の同胞団の広報担当官であった。

(22) Safran, Nadav, Egypt in Search of Political Community: An Analysis of the Intellectual and Political Evolution of Egypt, 1804-1952, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1981 (2nd printing, 1st: 1961).

第14章で、アル＝バンナーの思想を扱っている。やや単純化しすぎではあるが、全体を通して読むと、イスラームの伝統、リベラルな潮流、改革派イスラームの相互展開が押えられているので、十分に示唆的である。

(23) Sa‘īd, Rafa‘at, Ḥasan al-Bannā: Mu‘assis Ḥarakah al-Ikhwān al-Muslimūn, Matā … Kaifa … wa Limādhā?, Beirut, Dār al-Ṭalī‘ah, 1986 (4th ed., 1st ed.: 1977)

(24) Shalabī, Muḥammad, Ḥasan al-Bannā … Imām … wa Qā’id, Cairo, Dār al-Anṣār, n. d.

アル＝バンナー暗殺31周年（1980年）にあたっての、簡略な伝記。

(25) Shalabī, Ra’ūf, Ḥasan al-Bannā wa Madrasah “al-Ikhwān al-Muslimūn”, Cairo, Dār al-Anṣār, 1978.

アル＝バンナーの伝記であるが、かなり詳細に書かれ、またアル＝バンナーが定めた団員の日々の義務、といった点も具体的に述べられているので、「団員になる」ことの意味が明確にわかるなど、資料的にも価値は高



い。

- (26) Al-Sīsī, ‘Abbās, Ḥasan al-Bannā: Mawāqif fī al-Da‘wah wa al-Tarbiyah, Alexandria, Dār al-Da‘wah, 1982 (enlarged 2nd ed.).

伝記ではなく、アル＝バンナーの思想的な立場をテーマ毎に綴ったもの。「イスラームの統治」の節のように、アル＝バンナーが当時の法務大臣に宛てた書簡を収録しただけの節や、アル＝バンナーのロゼッタ来訪のようなエピソードも交えられている。

### Ⅲ. サイド・クトブ

アル＝バンナーに次いで重要な同胞団の思想家がサイド・クトブであることは間違いないであろう。弟のムハンマド・クトブも多くの著述を行っており、サイドのような独創性をもっているわけではないが、クトブ主義という点ではムハンマド・クトブの方がサイドよりも当てはまる面があり（特に『20世紀のジャーヒリーヤ Jāhilīyah al-Qarn al-‘Ishrīn』など）、精密な思想分析がなされなければならない。

- (27) Al-Bahnasāwī, Sālim, Sayyid Quṭb bayna al-‘Āṭifah wa al-Mawḍū‘īyah, Alexandria, Dār al-Da‘wah, 1986.

クトブの思想をクトブ主義から切り離そうとする試みの一つ。「ジャーヒリーヤ」と「タクフィール」の問題を取り上げ、結論的にはクトブはタクフィールを肯定していないと述べている。

- (28) Ḥamūdah, ‘Ādil, Sayyid Quṭb: Min al-Qaryah ilā al-Mashnaqah,

Cairo, Sīnā li-l-Nashr, 1987.

近年、同胞団やジハード組織について精力的に書いているノン・フィクション作家によるクトブの伝記。

(29) Ḥusayn, ‘Abd al-Bāqī Muḥammad, Sayyid Quṭb: Ḥayātuḥu wa Adabuhu, Manṣūrah, Dār al-Wafā’, 1985.

著述家としてのクトブの生涯を丁寧に探索。晩年の同胞団イデオログとしてのクトブには必ずしも集中せず、文学評論家としてのクトブにも重きを置いて、全体像をバランスよく描こうと努力している。クトブの著作の網羅的なリストが付されているので、便利。

クトブ自身の著作は多く、ここではしばしば引用される3点のみをあげる。

(30) Quṭb, Sayyid, Al-Ma‘ālim fī al-Ṭarīq, Cairo, Dār 1983 (10th ed.).

1960年代の同胞団の思想、あるいは1970年代のクトブ主義の思想を考える上で最も重要な書。これを著したがゆえに、クトブは処刑されたとも言える。もともとは、獄中からの書簡に、クルアーンの解釈書（『クルアーンの蔭に Fī Zilāl al-Qur’ān』）から関連主題の部分を抜粋して、足した作品。

(32) ———, Al-Salām al-‘Ālamī wa al-Islām, Cairo, Dār al-Shurūq, 1983 (7th ed.).

平和／平安の議論を、順に信仰、心、家庭、社会、世界と展開するあり方は、まさに同胞団のダーワ戦略の位相を反映している。

- (33) ---, Mahmoud Abu Saud, et. al. tr., Islam and Universal Peace, Indianapolis, American Trust Publications, 1977.

上の英訳。

- (34) ---, AL-'Adālah al-Ijtimā'iyah fī al-Islām, Cairo, Dār al-Shurūq, 1983 (9th ed.).

社会公正論。しばしば引用される。

- (35) Sivan, Emmanuel, Radical Islam: Medieval Theology and Modern Politics, New Haven, Yale Univ. Press, 1985.

エジプト、シリア、レバノンの同胞団、エジプトのジハード組織を中心に、サイド・クトブ、シリアのサイド・ハウワー、レバノンのファトヒー・ヤカンの思想を論じている。後の二者はクトブの弟子とされており、クトブの思想が中心課題である。アラビア語原典の著作、記事を基礎として十分読み込んでいる点は評価できる。ただ、著者の理解では、クトブの思想とクトブ主義は同じものとなっているが、若干検討の余地がある。クトブが社会の体制にはイスラーム的なものとジャーヒリーヤ（反イスラーム）的なものしかない、と述べたのは確かであるが、同時にクルアーン的シンボルでは常に二者択一的な提示がなされることも考慮に入れる必要がある。アッ=ティルミサーニーなどの立場のように、クトブは「タクフィール」論ではないとの解釈もあり、さらに検討を要する。

#### IV. アブドル=カーディル・アウダ

アウダはほとんど注目されることがないが、現代イスラーム思想、特に政治論において重要性を持っているように思われる。それは、アル=バンナー

が「ダーワ」論を中心に展開し、必ずしも体制論を明確に述べているわけではない空白を埋めると思われるからである。また、同胞団の中では、クトブの影響力が広がる以前の思想家として、その位置を計測する必要がある。少なくとも、以下の3冊は邦訳・紹介すべきであろう。なお、アウダは1954年に指導局のメンバーとして処刑された。

(36) 'Awdah, 'Abd al-Qādir, Al-Islām wa Awḍā'unā al-Siyāsīyah, Cairo, Dār al-Anṣār, n.d.

(37) — — —, Al-Islām wa Awḍā'unā al-Qānūnīyah, Cairo, Dār al-Anṣār, 1977.

(38) — — —, Al-Māl wa al-Ḥukm fī al-Islām, Cairo, Dār al-Anṣār, 1977.

#### V. ザйнаブ・ガザーリー

女性の運動家は総体的に少なく、また研究対象ともなりにくいだが、同胞団にしても、近年の新しい諸組織にしても男性のみに限られた現象ではない。その意味では、女性運動家の検討はこれから着手さるべき未開拓の課題である。現在のところ、著名なパーソナリティーとしては第一にザйнаブ・ガザーリーがあげられる。

(39) Al-Ghazālī, Zaynab, Ayyām min Ḥayātī, Cairo, Dār al-Shurūq, 1986.

ナセル政権の弾圧下の生活を綴ったもの。1957年から1960年代半ばに至

る同胞団の組織再建活動、そこにおけるクトブの指導的立場などについての叙述が重要。彼女の主宰していたムスリム婦人協会のことや、同胞団に参加する経緯についても述べられている。

(40) ---, Nahwa Ba'th Jadīd, Cairo, Dār al-Shurūq, 1986.

イスラーム共同体再生論。

(41) Hoffman, Valerie J., "An Islamic Activist: Zaynab al-Ghazali," in Elizabeth Warnock Fernea (ed.), Women and the Family in the Middle East, Austin, Univ. of Texas Press, 1985, pp. 233-254.

著者によるガザリーとのインタビュー（1981年）および上記（39）の一部英訳。簡単な紹介付き。

## VI. ウマル・アッ=ティルミサーニー

ウマル・アッ=ティルミサーニー（1904～1986）は、1933年に入団し、アル=バンナーの信任を受けた中心メンバーの一人となり、1954年の弾圧の際には指導局の一員として、強制労働15年の判決を受け、1971年まで獄中で過ごした。職業的には1954年まで弁護士であったが、釈放後は、種々の法律が大きく変わっていたので弁護士に戻ることは諦めたという。第三代最高指導者として、1970年代半ばから1980年代半ばまで、サダト政権との関係と、より急進的な新しい組織との関係との間で、微妙で難しい運動再建の作業を成し遂げたについては、功績が大であろう。思想家として必ずしも独創的なものを持っているわけではないが、組織人としては第一級の重要性を持つ。

(42) Al-‘Adawī, Muṣṭafā, ‘Umar al-Tilmisānī bayna Ḥamās al-Shabāb wa Ḥikmah al-Shaykh, Giza, Dār al-Aqṣā, 1987.

アッ＝ティルミサーニー追悼の一連の著作の一つ。前半が簡略な伝記で、逝去時の各界人士の追悼の言葉の抄録を挟んで、後半はアッ＝ティルミサーニーの発言などを収録したもの。

(43) Qā‘ūd, Ibrāhīm, ‘Umar al-Tilmisānī Shāhidan ‘alā al-‘Aṣr: Al-Ikhwān al-Muslimūn fī Dā’irah al-Ḥaqīqah al-Ghā’ibah, Cairo, Al-Mukhtār al-Islāmī, 1985.

アッ＝ティルミサーニーからの聞き書きを中心とする同胞団史。1928年の同胞団の成立から、1981年のサダト暗殺事件まで。

復活以降も含めて、同胞団の中道・主流であり続けたアッ＝ティルミサーニーの立場として、「特別機関」について、そのものは英国、シオニストとの闘争のための組織で初めは正当なものであったが、後にその責任者のサナディーや一部メンバーが逸脱し、最高指導者に対抗するようになって誤った道を歩んだ、との見解（63～68頁）、「タクフィール」についてサイド・クトブはそのようなことは全く言っていないとしてクトブ主義とクトブを分離する見解（139～140頁）などが興味深い。

同胞団と自由将校団の関係について、アジーズ・アル＝ミスリーが仲介者であったというミッチェル、サラーフ・イーサー、アブドル＝アズィーム・ラマダーンの見解は全く間違いである、と断定している（91～92頁）。アッ＝ティルミサーニーによれば、アル＝ミスリーは同胞団の宗教的側面には全く理解を示さず、仲介できるはずもなかったという。1952年革命では、同胞団と自由将校団の間には、革命後イスラーム法を施行するとの合意があり、それに基づいて同胞団はナセルを支えたが、「同胞団の誤りは自ら革命政権に参加しようと考えなかったこと」である、と言う（93～95頁）。その結果、対立、弾圧へと進むわけであるが、1967年戦争での敗北について、獄中

において「必ずやナセルには罰が下るべきと思っていたが、これがそれだったのかという思いを抱いた」「しかし、同時に祖国については、その被った敗北について深い悲しみの念が溢れた」としている。

終りの4分の1はサダト時代で、1971年のアッ=ティルミサーニー釈放に始まる両者の良好な関係が、イスラエルとの和平で決定的にヒビが入る様子が描かれている。ただし、同胞団は「他のアラブ諸国のように、サダト自身を誹謗することはせずに、あくまで聖なるジハードの問題を提起し続けた」としており、全体としてナセルに対する評価（下の(46)に述べられている）と比較するとサダトに対して温情的な様子が見える。もっとも和平をめぐるサダトと同胞団の対立はよく知られており、それ以上に興味を引くのは、1979年と80年の両者の和解努力の様子（156～162頁）であろう。

アッ=ティルミサーニー自身による主要な著作は次の通り。

- (44) Tilmisānī, ‘Umar, Dhikrīyāt … lā Mudhakkirāt, Cairo, Dār al-Ṭibā‘ah wa al-Nashr al-Islāmīyah, 1985.
- (45) ———, Shahīd al-Miḥrāb: ‘Umar bin al-Khaṭṭāb, Cairo, Dār al-Ṭibā‘ah wa al-Nashr al-Islāmīyah, 1985.
- (46) ———, Qāla al-Nās … wa Lam Aqul fī Ḥukm ‘Abd al-Nāṣir, Dār al-Ṭibā‘ah wa al-Nashr al-Islāmīyah, 1985.
- (47) ———, Ayyām ma‘a al-Sādāt, Cairo, Dār al-I‘tiṣām, 1984.
- (48) ———, Al-Mulham al-Mawhūb, Ustādh al-Jīl: Ḥasan Aḥmad ‘Abd al-Raḥmān al-Bannā, Cairo, Dār al-Anṣār, n.d.

## VII. 7月革命前後～ナセル時代をめぐって

ムスリム同胞団が1952年の7月革命において果たした役割、ナセルら自由将校団との関係などについて検証し直すことは、同胞団が戦間期エジプトにおいて持った社会的な存在と意味を再構成する上で、非常に重要である。本書第Ⅱ部や上にすでにあげた文献でもこの問題はしばしば取り上げられている。紙数の都合で以下には3点のみをあげる。

- (49) Abu al-Naṣr, Muḥammad Ḥāmid, Ḥaḡīqah al-Khilāf bayna al-Ikhwān al-Muslimūn wa 'Abd al-Nāṣir, Cairo, International Press, 1987.

第4代最高指導者(1986年～)の回顧録。題名にある、ナセルとの対立の問題が半分以上を占めているが、叙述は著者とアル＝バンナーの出会いから始まっている。興味深いのは、著者が上エジプトの出身で、本来イスマイリアで始まった——上エジプトに足掛かりのなかった——同胞団がどのように上エジプトに進出したかが伺える点と、著者がすでに「ムスリム青年協会」に加入していたが、著者も含めてムスリム青年協会の思想的な弱さにあきたらない人々が同胞団に吸収されていく様子が分かる点である。

ナセル政権との対立の時期については、当然、「特別機関」の扱いが一つの焦点をなしていたが、著者は一貫して、特別機関解体を方針とするフダイビーを支持していた。このことは、著者がアッ＝ティルミサーニーの死後、第4代最高指導者に選出されたことと無縁ではないであろう。1980年代半ばにアッ＝ティルミサーニーの後継者問題が生じたときに当然候補として名前が上がるべき人物たちの中で、かつて「特別機関」と関連のなかった一従って、同胞団に対する「テロリスト・キャンペーン」が張られる心配のないのが著者だったからである。このことは直ちに、アル＝バンナーの死



後、「合法路線」を採り、かつ合法路線の強い印象を与えるためにフダイビーが最高指導者に選出された経緯を思い起こさせる。

ナセルと対立が深まっていく時期については、近年出版されている同胞団側の資料以上に新しい解釈を作り出すような内容ではないが、フダイビーの側近として、ナセルとの交渉などを近接して体験しており、第一次資料として価値は高い。

(50) Ḥusayn Muḥammad Aḥmad Ḥamūdah, Asrār Ḥarakah al-Ḍubbāṭ al-Aḥrār wa al-Ikhwān al-Muslimūn, Cairo, Al-Zahrā' li-l-I'lām al-'Arabī, 1985.

アッ=ティルミサーニーはサダトが大統領になってから書いた自伝 (Al-Baḥṭh 'an al-Dhāt) でアル=バンナーとの関係について述べていることは無根拠と指弾しているが、ナセルもサダトも同胞団と自分の関係については、その時の状況と力関係から都合のよいことを述べていたことはごく当然であろう。本書は同胞団と初めから深い関係を持っていたのはナセルで、サダトはむしろナセルより後であったことを明らかにしている。本書は「同胞将校団」について、内部にいて、1952年革命にもナセルとともに参加した者の回顧録として、貴重な資料となっている。本書第Ⅱ部を参照のこと。

(51) Ṣiddīq, 'Alī, Al-Ikhwān al-Muslimūn bayna Irhāb Fārūq wa 'Abd an-Nāṣir, Cairo, Dār al-I'tiṣām, 1987.

団員の回顧録の一つ。1948年に同胞団義勇軍第1師団の一人としてパレスチナ戦線に赴くところから、3つの主題——パレスチナ戦争、スエズ地帯反英闘争、ナセル政権下の弾圧、を描いて、1967年の釈放で終る。パレスチナとスエズでの戦いに関連して、10余枚の写真が収録されているのも参考になる。

(52) al-Sīsī, ‘Abbās Ḥasan, Jamāl ‘Abd al-Nāṣir wa Ḥādith al-Manshiyah bi-Iskandarīyah, 26 Uktūbar 1954, Alexandria, Dār al- Ṭibā‘ah wa al-Nashr wa al-Sawtiyāt, 1987.

同胞団の徹底弾圧のきっかけとなった1954年のいわゆるナセル暗殺未遂事件が、実際にはナセルの自作自演であったことを論証。確かに、公判記録などから事件を再構成してみると、おかしな点が目に付く。フアード・ザカリヤーのような、思想的には同胞団に敵対している者も、この件についてはナセルの「陰謀」説であることは興味深い。ザカリヤーが論じているように、暗殺が実際に同胞団の「特別機関」の一部による計画であったとしても、彼ら自体が公安警察にコントロールされていた可能性が強い、との説はかなり信憑性が高いであろう。一般的に見ても、問題は革命のヘゲモニーをめぐる対立であり、暗殺未遂事件は実体が何であれ、その中では舞台装置の一つに過ぎなかったことは確かである。